

第一部 建築会館手冊

建築会館

Architectural Institute of Japan

建築博物館

AIJ Architectural Museum

AIJ BUILDING HANDBOOK

会員が集う広場：建築会館の履歴書

旧会館から新会館へ

本会は、1886(明治19)年に「造家学会」の名で創立された。当初は個人宅や工学会、東京地学協会などを借りて事務所を置いていたが、1896(明治29)年ごろから独立の事務所を構えたいという声が大きくなり、当時の執行部・会員諸氏の尽力と困難を経て、ようやく1920(大正9)年に銀座(当時京橋区西紺屋町)の地所を入手した。その後も関東大震災をはじめ紆余曲折あったが、1930(昭和5)年に会館の竣工にこぎつける。これが「旧建築会館」。

設計案は設計競技によって募集し、順位をつけずに7案を選出したのち、当選案中から矢部金太郎案に基づき実施設計が進められた。関東大震災後の耐震耐火構造の普及を促進するために設立された「復興建築助成株式会社」が建設にあたり、本会が割賦払いで建物を買収するという形態の事業であったが、実施設計は矢部が担当するかたちとられ、施工は大林組が請け負った。

本会にとっての「戦後」は会館の震災復旧とともに始まり、1950年代以降は増改築やエレベータ設置、設備更新などが行われたが、銀座の旧会館では、貸しビル経営と学会活動の膨張とを両立させていくことが出来なかった。1972年ごろ、読売新聞社から地所の売却を望む申し入れがあり、本会もこれを前向きに受け止め、1979年には三田の同社所有地との等価交換が決定された。こうして現在の「新建築会館」の建設計画が具体化のフェーズに入っていく。

設計は、学会自身が推進していた設計競技の改善運動をも踏まえて、2段階設計競技が採用された。第1段階で5名



図1 | 旧建築会館(銀座)外観(『日本建築学会百年史』より)



図2 | 新建築会館に引き継がれた旧会館の細部(ホールのホワイエ)

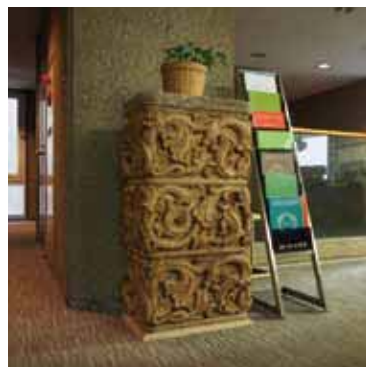


図3 | 新建築会館に引き継がれた旧会館の細部(2F事務受付前)



図4 | 新建築会館に引き継がれた旧会館の細部(北側ゲート)



図5 | 新建築会館に引き継がれた旧会館の細部(中庭に面した壁面上部)

を選び、第2段階でこの5名による指名設計競技を行って設計案を決定する、という方式である。これにより秋元和雄案が選ばれ、秋元は清水建設を退社、独立して会館の設計監理にあたった。審査委員長は吉武泰水で、委員の内井昭蔵は競技実施前に要項のもととなる試案を作成した中心人物であったが、競技後も実施設計者の補佐役として設計を支えた。1980年には正式に秋元が設計者に指名され、大林・鹿島・竹中・清水・大成の大手5社のJVによって、1982年11月19日に落成を迎えた。

広場としての新建築会館

秋元案に対する競技時の評価を見ると、「今回の提案の最も多い囲み型プランの中で、最も優れた解決を行っている」とされ、機能的で融通性のあるプランとされたこと、加えて「地域環境と会館の機能の新しい接点が、極めて開かれた形で提案されている」とあるように、都市に調和し、開かれたデザインが高く評価

されたことがわかる。実施案もこうした特徴をよく受け継いでおり、南北両サイドに開かれたゲート、やわらかく囲われた広場(中庭)、商店街に向き合う北ファサードとそこから階段状にセットバックしていくヴォリュームの構成、地下1階の図書館に光を落とすサンクンガーデン、こうした構成に沿った機能的なプランなどがその特徴と言えるだろう。

一方、この時期には近代洋風建築の保存活用が、建築界の重要課題のひとつになっており、本会としても活発に保存要望を出しており、1980年には『日本近代建築総覧』を刊行している。こうした背景もあって、本会は旧会館の歴史的価値の調査を行った。また、旧会館の建物を部分的に新会館に移して保存し、再利用できないかという声が上がリ、これが実施設計に組み込まれることになった。私たちが会館のゲート、外壁、事務受付前のロビー、あるいはホールに目にするのできるアール・デコの細部がそれである。

こうして、事務機能に加え、ホール、会

議室、図書館、テナント(オフィス、飲食店)等を含む複合施設として、新しい建築会館が出来上がった。本会会員の広場であり、同時に都市の広場でもある。

その後、本号でも紹介する建築博物館(2003年開館)の構想の一貫として、中庭に可動式の幕屋根が架けられた(秋元和雄設計)。当初は中庭をガラスの屋根で覆って展示空間とする案もあった。このとき、資料頒布所(書店)が置かれていたスペースが建築博物館ギャラリーとされ、中庭は展示やイベントの会場として活用されるようになった。

さらに、2012年にはホールの向かいに建築書店(Arechi Books)がオープンしている。(編A)

参考文献

- 1.『建築会館新築工事概要』(建築学会編・刊、1928)
- 2.『新建築会館新築工事竣工図』(日本建築学会／秋元和雄設計事務所編・刊、1981)
- 3.『日本建築学会百年史(1886-1985)』(日本建築学会編・刊、1990)
- 4.『日本建築学会 建築博物館いよいよ具体化』(『日刊建設工業新聞』2002年5月7日付)



図6 | 北側のレストラン街(テナント)



図7 | 南側ファサードから中庭を見る



図8 | 北側ゲートから中庭を見る



図11 | 中庭を覆う可動式の幕屋根



図9 | 会館エントランス(手前はホール入口、右が中庭)



図10 | 中庭から図書館を見る



図12 | ホール(東日本大震災復興シンポジウム2012)



図13 | 2Fの事務局受付

図書館 —— 情報発信ライブラリーへの脱皮

建築会館に入り、中庭左手の建築博物館のなかの階段を下りた地階に、建築学会図書館はある。本稿では実はあまり知られていない図書館の利用方法や歴史、貴重書、そして現在の図書館が目指している方向などについて会員の視点から報告することにした。

同館は日本建築学会会員のために設けられた図書館であり(会員外は正会員の紹介状と利用料が必要)、9時30分から17時まで開館している(詳細はホームページを参照。http://www.aij.or.jp/tosyokan.html)。利用者は受付で会員証を提示する必要があり、ロッカー専用のコインを受け取って、携帯品を左手のロッカーに預けてから閲覧室に入ることになる。なお、同館は土木学会附属土木図書館と提携しており、会員は土木図書館も利用することができる。

閲覧室に入るとすぐ光窓沿いに明るい閲覧席があり、近くには新着雑誌や参考図書の棚が置かれている。中ほどには単行本の書架が、奥には雑誌や研究報告のバックナンバーをおさめた電動書架が並んでいる。利用者はいずれも自由に手にとって閲覧することができる(一部閉架)。ただし、資料の貸出しは行っていない。文献複写はモノクロ30円、カラー120円で可能であり、館内ではインターネットの無線接続サービスも行われている。卒業論文の時期などに利用が集中することもあるが、比較的余裕をもって使うことができ、とくに午前中は利用者が少なく、狙い目だという。

同館は「わが国の建築学の歴史と創造にかかわる図書・記録やその他の資料・情報を収集・整理・保存して、主に会員の利用に供する拠点施設である」ことを基本理念とし、建築専門の図書館としては蔵書数最大を誇る図書館で



図1 | 閲覧室の様子

ある。大正年間に妻木頼黄(1859～1916)の蔵書と辰野金吾(1854～1919)の蔵書が寄贈されたのを母胎に、昭和5(1930)年に旧建築会館建設に際して、3階の一室を用いた図書室として同館は設けられた。昭和25(1950)年には図書委員会が設置され、体系的に図書収集が始められ、昭和46年からは建築関係の出版社からの新刊図書の寄贈協力を得るようになった。そして、昭和58(1983)年に現建築会館の建設に伴い、大幅拡張され、現在に至っている。

長い歴史のなかで集められた図書は約46,000冊、雑誌・研究報告書は約1,200種に及び、さまざまな貴重書がおさめられている。例えば、前述した妻木文庫は明治期を代表する建築家として知られる妻木頼黄の所蔵していた図書類と図書類が遺族により寄贈されたものである。日本橋や広島仮議院、東大寺大仏殿明治大修理など妻木自身が手掛けた作品に関する資料のほか、伝統的な雛形や民家の図集なども含まれている。辰野文庫は日本建築学会の創始者で会長も務めた辰野金吾が所有していた資料が寄贈されたもので、設計事

務所での自作図面集や江戸時代の書籍などを含むものである。この他に多数の貴重な明治大正昭和初期の建築写真なども所蔵しており、後述するウェブ上で閲覧ができる。

このように収集・整理・保存する情報の質と量の重要性は以前と変わらないものの、一方で学会図書館に求められるものは急速に変化しつつある。決して多いとは言えない予算の枠内で図書を購入し、限られた職員・スペースを前提として、建築分野の専門図書館として諸機能の拡充を図り、かつ会員からの要望にも応えていく必要がある。特に情報化社会の急速な展開は、図書館全般に公開方法の変化の必要をもたらした。同館が目指すひとつの方向もデジタル化技術を駆使した「情報発信型図書館」への脱皮というものであろう。

図書委員会では2000年に「新しい図書館のイメージ」を打ち出し、建築学発達史・研究史に関わる全ての図書資料の収集・整理・保存、全所蔵資料に関する情報の電子化と公開、他の関連施設との電子的な連携、以上の三機能の永続性の保証、それに伴う適切な附



図2 | 妻木文庫所蔵資料

属サービスの提供をうたっている。この構想は各代の図書委員会により、引き継ぎ、更新されてきた。例えば、科学研究費補助金を獲得して、デジタルアーカイブスのホームページが整備されてきたし、現在は改めて所蔵する貴重本の洗い出し、整理作業が進められている。いずれも歴代図書委員会委員長をはじめとする委員の努力によるものである。例えば、2007年にCiNii(<http://ci.nii.ac.jp/>)において過去の『建築雑誌』の全文(刊行後一年以上経過したもののみ)が公開されたが、利用された方も多いだろう(本年4月よりCiNiiに関しては、会員・会員外に限らず課金[機関定額制]となった。なお、会員は本会ホームページの検索システムから無料で同じデータが見られる)。

実際、近年の図書館デジタルアーカイブ

イブスの充実ぶりはめざましい。ここでは学会が直接出版したもののうち刊行から30年以上経過したものを中心に、PDFファイル形式で全ページの閲覧が可能になっている。例えば、日本建築学会編『近代日本建築学発達史』（丸善、1972年）は、建築学会80周年の記念事業として企画されたものであり、分野別に明治初期に西洋建築が導入されて以降の発展過程を網羅的に記録したものである。これまで入手が困難だった著作だが、学会が苦勞してすべての著作権者に了解を得て、掲載が可能になったものである。この他にも仕様書・規準、図面写真集などの歴史的資料や、学会刊行物以外でも、『満州技術協会誌』、『満州建築協会雑誌』などを閲覧できる。

今後、ウェブを通じた利用は増加する一方で、実際に来館しての利用は減少が見込まれている。デジタルアーカイブスは図書館を直接訪問できない多くの会員を視野に入れたものである。一方、図書館自体の価値の創出に向けては、他の大学図書館や公立図書館との違いが打ち出せるかが鍵となるだろう。現在、進

められている貴重書の目録づくりはその前提となるものだ。そして、言うまでもないことだが、学会図書館の強みは会員のネットワークを有することにある。収蔵資料が会員の専門知識と結びつくことでその価値が見いだされ、イノベーションが生まれていく。そんな未来の図書館構築のためにも、われわれ会員が積極的に意見を出し、利用していく必要がある。そうすることで学会図書館は魅力を増し、われわれにとっても使い勝手のよいものとなっていくことだろう。

なお、本稿の作成にあたり、学会事務局の峯浦敏氏にお話をうかがった。
(編H)

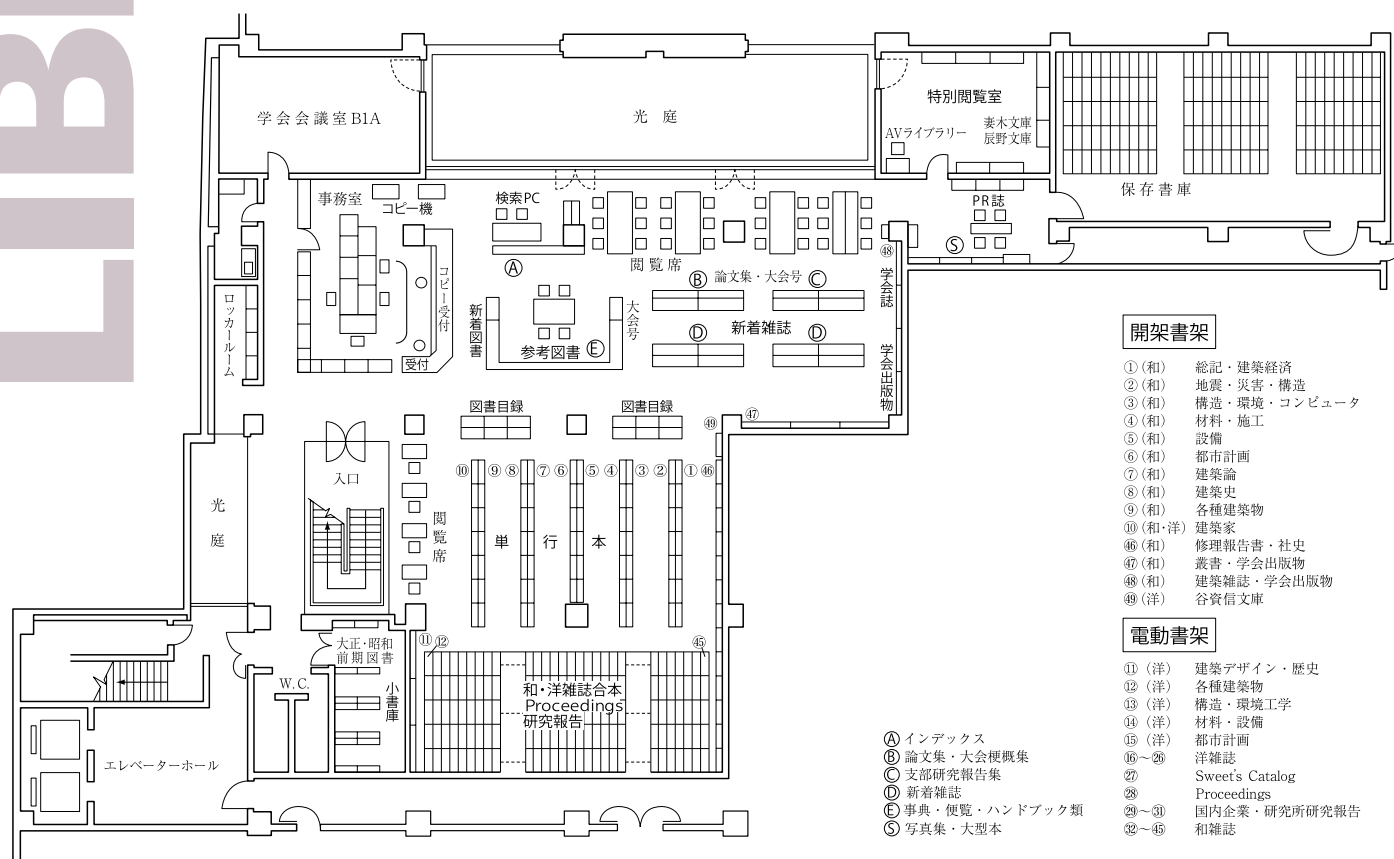


図3 | 館内平面図

建築博物館 —— 建築の知的commonsを築く

話し手

藤岡洋保

Hiroyasu Fujioka

東京工業大学大学院理工学研究科教授、本会建築博物館委員会幹事／

1949年広島市生まれ。東京工業大学工学部建築学科卒業。

同大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程・博士課程修了。工学博士。近代建築史。

著書に『表現者・堀口捨己—総合芸術の探求—』『清家清』ほか。

2011年日本建築学会賞(論文)。2013年日本建築協会「建築と社会」賞(論考部門)

「建築博物館」設立前史：

1980年代の動向

—— 建築博物館の設立にいたる経緯を教えてください。

いろいろな雑誌に散見されるように、建築博物館が必要だということは、日本の建築界で以前から何度も言われてきました。日本建築学会でも、1980年代に村松貞次郎先生や山口廣先生がその必要性を訴えられ、仙田満先生にも加わっていたいて、その案を作成したことがあります。それは根岸の競馬場の建物を使って国立の建築博物館を設立しようという、かなり具体的な提案でした。

そのとき、そもそも「建築博物館とは何か」がわからないということで、1987年に私が担当して世界の建築博物館の調査をしました。具体的にはICAM(International Confederation of Architectural Museum)に加盟している、もしくは加盟希望の博物館・団体83を対象にアンケート調査して、有効回答28を得ました。ちなみに、ICAM設立の中心人物はF・ランベール女史です。シーグラムの社長のお嬢さんで、シーグラムビルをミースに依頼するようにお父さんに進言した人で、1979年に世界で最も大規模かつ整った建築博物館のひとつであるCCA(カナダ建築博物館)を設立するとともに、世界の建築博物館のネットワーク(ICAM)を立ち上げました。

この調査で分かったのは、まず建築博物館の歴史は浅いということ。世界で最初の建築博物館はモスクワのA.V. シューセヴァ国立科学建築博物館で

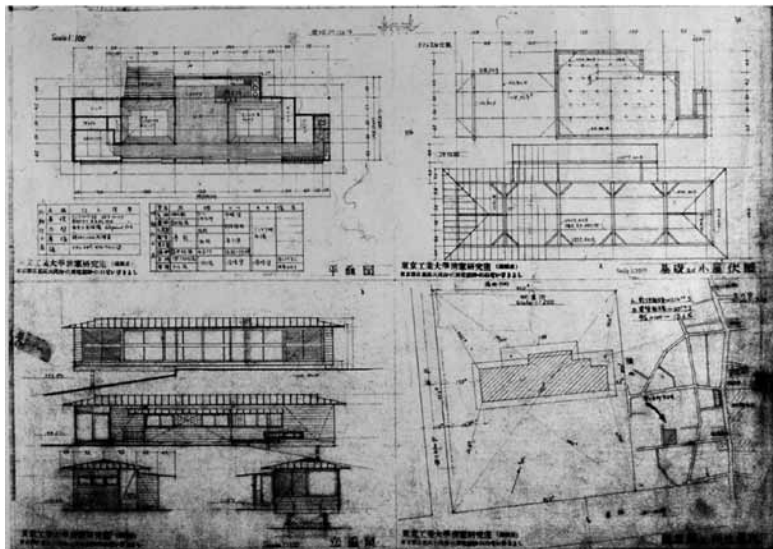


図1 「斉藤助教授の家」計画案(建築博物館所蔵 清家清資料より)

1934年設立ですが、2番目と言われるフィンランド建築博物館は1956年で、他は1960年代以降の設立です。歴史的建造物を利用した例が多いこともわかりました。さらに、ひとくちに建築博物館と言っても内実はきわめて多様だということで、例えば、フィンランドの建築博物館は図面アーカイブズというイメージに近いですが、私が訪ねたとき図面の収蔵点数はさほど多くなく、むしろ建築についての社会的啓蒙の役割が強く、建築展などを開催する建築文化センターといった趣でした。オルタ博物館はヴィクトール・オルタの自邸そのものが展示物ですし、大学の建築史研究室が加盟しているケースもありました。

このことから、日本で建築博物館をつくるにあたって、独自に計画していいことになります。本会の当時の構想には、資料の保存や展示だけでなく、例えばアジアの建築の専門家や学生に建築の

研修の場を提供するというアイデアもあったのです。

建築博物館、たちあがる。

2000年あたりから紙の設計図面が消えていく状況を嘆く声が大きくなってきました。有名建築事務所が畳まれたり、あるいは図面をCHに焼いてオリジナルを処分したりといったことが増え、一方でCADやCGの普及も進みます。もうひとつは、ポンピドゥー・センターなど海外の機関が日本を含む世界の有名建築家の図面収集をはじめ、放っておくと日本人建築家の研究をするために海外に行かなければならないというような状況になりかねないという危機感も膨らんできました。文化資産の海外流出が起ころはじめてたわけです。こういった状況に対して、財政的に厳しくとも手をこまねいていくわけにはいかないと、仙田満会長時代

に決断があり、2003年に建築博物館をたちあげたわけです。

収集対象は、まず日本のモダン・エイジ(現代も含む)の図面資料に限定すること、図面に加えて写真資料を対象とすること(模型はスペース上の理由から主対象としない)、そして基本図・詳細図さらには構造図・設備図などのワーキング・ドローイングをもできるだけ含めることなどを方針としています。最後の点は、日本建築学会がカバーする広い領域に対応しているわけですが、これは世界の建築博物館では珍しい収集方針です。アメリカの National Building Museum のように建築技術の展示をする博物館がないわけではありませんが、欧米の建築博物館の基本姿勢はあくまでもアートとしてのドローイングの収集なのです。本会としてはそれとの差別化も意識しました。

博物館では、収集・保存と公開という二つの異なる機能を両立させなければなりません。それに対応して、館長の下、前者を私が、後者を三宅理一先生が小委員会幹事として受け持つ体制ができました。

第1号の所蔵資料の「伊東忠太資料」は、建築博物館開設のタイミングでちょうど御遺族からの資料寄贈が実現したというものでやや特殊ですが、それ以外はいま申し上げた体制で進めてきました。私の仕事は、建築博物館の方針に沿って収集することですが、まずは有名建築家の、まとまった点数のある図面群を主たるターゲットとして収集を進め、寄贈の申し出にも対応しつつ、現状で5万5千点くらいになっています(*表1)。受

入れを前提に、資料のデータベース作成を進めているものもあります。

日本の建築教育・職能像を踏まえ、独自の包括的なアーカイブズを

資料の受入れにはルールが必要です。まず、受入れ候補となる資料が整理された状態になっていることはほとんどなく、内容も価値も、精査しないと分かりません。そこで、寄贈の申し出があった場合、まず資料収集小委員会で検討の余地があると判断すれば本委員会に受入可否かの方針を打診します。本委員会で受入れ検討の方向が示されれば、資料のデータベース作成作業に入ります。図面の情報を1点ずつ入力する作業です。これが極めて重要です。時間も費用もかかりますが、この作業なしには資料の全貌も価値も見えてきません。その作業を行って資料価値があると判断されれば本委員会に再び諮って、受入れの手続きに進みます。そして寄贈者との間で受入れは全部なのか一部なのか、どこまで公開が可能か(個人情報やセキュリティ等)といったことなどを取り決めます。

データベース作成にはノウハウが必要で、重要なのは冗長性を高めること。検索の可能性を広げ、入力ミスのフェール・セーフや利用時の利便性を上げられるからです。例えば図面に書かれているタイトルと、資料としての正式タイトルを分けておく、正式タイトルにフリガナを振っておく、図面1枚に含まれる情報をできるだけ多く書き上げておく、といったことです。これは私が大学院生

のころから行ってきた図面整理の経験・蓄積に基づいていますが、史料アーカイブズ整理をムーブメントとして広めていくためには、この種のノウハウを広めることも重要で、求められれば提供することにはしています。

なお、本会の建築博物館は近代の図面資料を独占するつもりはありませんし、利用の点でもリスク分散の点でも、私は分散保存の方が望ましいと思います。各地の建築博物館がインターネットを通じて情報を共有しつつ、日本全体でひとつの大きな建築博物館になることが私の理想です。

——資料整理には通常、何人くらいのチームでどれくらいの時間をかけますか。

基本的には一群の資料を1人か2人で作業するので、一概には言えませんが、その仕事にかりきりになってもらっても2年くらいはかかりますね。でも、図面は豊富な情報量を持っているので、図面を通して設計者と対話できる。そういう楽しさを次世代に伝えていきたいですね。もちろん感受性の如何によって得られる情報量が変わるのも事実ですが、いずれにせよ、資料の価値は自明ではなく、「発見」するもののなのです。

図面資料を補完するのに、写真も重要な資料になります。図面だけでは、そのとおりに竣工したという保証が得られないという問題がありますが、写真はそれを補ってくれるからです。また、プロのカメラマンは工事写真も撮っていて、これは将来的には技術史等の観点から価値が出てくる。しかし、プロは著作権の関係でアーカイブズへの寄贈には



図2 | 山田守展の会場風景(建築会館ギャラリー)

資料名	内容	正式受入年
伊東忠太資料	野帳、葉書絵、うきよの旅、忠太自画伝、怪奇図案集甲、修学旅行記、法隆寺関係資料等。850点の整理済資料は本会HPより公開。約1,000点の未整理資料は整理継続中。	2002
山田守資料	図面等172点	2005
石田繁之助資料	図面等8点	2005
小泉大成資料	『宮殿造営記録図面編・解説編』、『宮殿造営の記録』等3冊	2006
後藤慶二資料	図面、構造実験の写真乾板、『建築雑誌』表紙図案等、構造学に関する資料、朝鮮半島旅行の際のスケッチほか7,434点	2008
清家清資料	図面30,703点(534作品)	2008
吉田鉄郎資料	旧福野郵便局庁舎、同離れ設計図3点	2009
妻木頼黄資料	辞令等の文書460点	2011

表1 | 建築博物館収蔵資料(2013年8月現在)

慎重です。写真資料の公開に関しては、米国のESTOのように、著作権所有者に対して、その写真が出版等で使われるときに正当な対価が支払われるような仕組みを整備すべきでしょう。また、写真家にとってモノクロのネガは制作の中途段階のもので、紙焼きこそが作品です。デジタル化だけではなく、収集も公開も、図面の場合とは異なる配慮が必要です。多種多様な図面だけではなく、写真や手紙などの資料なども、併せて収集することが望ましい。

——欧米には、多様な資料群を包括的に集めて研究に資するというようなアーカイブズはないのでしょうか。

あまり聞いたことはないですね。

——さきほども、欧米ではショー・ドローイングに関心が偏るというお話がありましたが、それは教育から職能にいたる社会システムの差異と対応していると考えてよいですか。

そうですね。だから「建築」という枠組みをどう設定するかでアーカイブズの枠組みも違ってくる。日本なら、例えば大正時代に竣工した明治神宮宝物殿(1921年竣工)でRCのかんりの大スパンが実現しているとか、明治神宮外苑の聖徳記念絵画館(1926年竣工)の中央大広間上のドームがRCシェルであることについての資料などは、本会の構造の専門家にも興味あることだろうと思います。そもそも欧米の建築学科には構造の先生は常勤ではほとんどいませんし、職能の観点からみても、建築家とエンジニアは別です。そもそも日本建築学会のような学術団体は、世界には少ないのです。だから、本会の特徴を踏まえた建築博物館を打ち出すことには意味があると考えました。

資料公開に向けて

次に公開についても慎重を要する点があります。まず資料の現物を閲覧に供することは基本的にしない。劣化、破損、紛失の危険が高いからです。

原則としてデジタル化された画像に限定し、ディスプレイ上で見ていただくという方向で進めていくことになると思います。デジタル化には費用も必要で、科学研究費等の外部資金の獲得が不可欠ですが、他にも画像のデータ形式、その閲覧方式、そしてスキャンの方法に至るまで、デジタル技術の未来は予測不能という問題もあります。現実には、デジタルデータの寿命は実質的には短く、現物の保存がどうしても必要です。

次に検討を要するのは、複写への対応ですが、ネット端末での複製はできないようにしますが、透かしを入れるなどさまざまな技術が開発されているものの、それを消去する技術と防ぐ技術とのイタチごっこになります。ネット上ではサムネイル程度の閲覧に留め、高解像度の画像は建築会館に来て閲覧していただき、研究以外の目的には使用しないなどの誓約の上で複写いただく、というように、閲覧者の要望や、会員／非会員の別によって、段階的な対応をすることになると思います。

——展覧会への貸し出しなどは？

一定の条件下で応じることになりますが、著作権の問題とか、保険をかける等、ここでも慎重な配慮が必要です。もちろん、建築博物館としても、できるだけ独自に展覧会を行うようにしています。これまでに山田守展、清家清展などを実施してきました。

建築知のコモンズ——文化資産の重要性

——今日は資料保存の可能性と難しい課題を多面的に教えていただきました。

アーカイブズの明るい未来ばかり語る方がいますが、今日お話したように多様な問題群がある。しかし、それでも収集の努力を怠らないこと、そして、すぐに対応ができなくても少しでも資料の消失を遅らせる、つまり処分の判断を先延ばしにして、後世への継承の可能性を残すことが大事です。そうした考え方を多くの方に持っていただきたいと思います。

——建築博物館の当面の課題についてはいかがですか。

収集資料を増やしていくこと、資料整理の体制を確立すること、そのための外部資金を獲得すること、そして収蔵スペースの拡充についても検討を進めていくこと、が当面の課題です。これらに取組みつつ、その上で、資料の公開を進めていきたいと思います。社会に対する発信も重要ですし、会員サービスにも留意したい。

——建築の知的コモンズをつくっていく仕事ですね。

そうです。和田章前会長は、建築学会の文化資産をきちんと位置づけることを提言されました。21世紀は国際化と文化資産の意義がますます大きくなるでしょう。海外機関との連携、文化的な発信といったことを考えると、建築博物館の役割はますます大きくなると思います。

一方で、建築図面がデジタル化されていく趨勢を踏まえ、未来の建築博物館のあり方を考えていくことも重要です。CADデータの保存も簡単ではありません。BIMになると、設備やコスト等の情報を包括的に含むだけではなく、設計中はもちろん、竣工後の管理の際にも更新されるものですから、なかなか寄贈されないでしょう。収蔵資料になっても、閲覧や研究のあり方も激変するでしょうね。これも早めに議論していった方がよいでしょう。

——どうもありがとうございました。

(2013年7月12日、建築会館地下1階会議室にて)

(文：編A)

参考文献

- 1.「建築博物館構想」(<http://www.aij.or.jp/jpn/archives/museum.htm>)
- 2.藤岡洋保「図面・写真資料の重要性とその保存活用：日本建築学会建築博物館を中心に」(本会建築アーカイブズ小委員会『日本における建築アーカイブズの構築に向けて』2007年3月 所収)
- 3.藤岡洋保談(聞き手：山名善之)「日本の建築アーカイブズに期待すること」(『ディテール』2011年1月号)

ARCHI BOOKS, SALOON, and PLAZA

まだまだある、開かれたファシリティ



建築書店

建築博物館とともにギャラリーが開設されたのに伴い2F事務室横に移設されていた本会の資料頒布所を、2012年に再び拡張するかたちで、ホールの向かいにオープン。本会関連書籍・資料・論文集だけでなく、幅広く建築関連書籍を販売。自動販売機を備え、デザイナーズ・チェアでコーヒー等を楽しみながら本を選べる。2013年に始まった日本建築学会著作賞の受賞書籍も陳列されている。

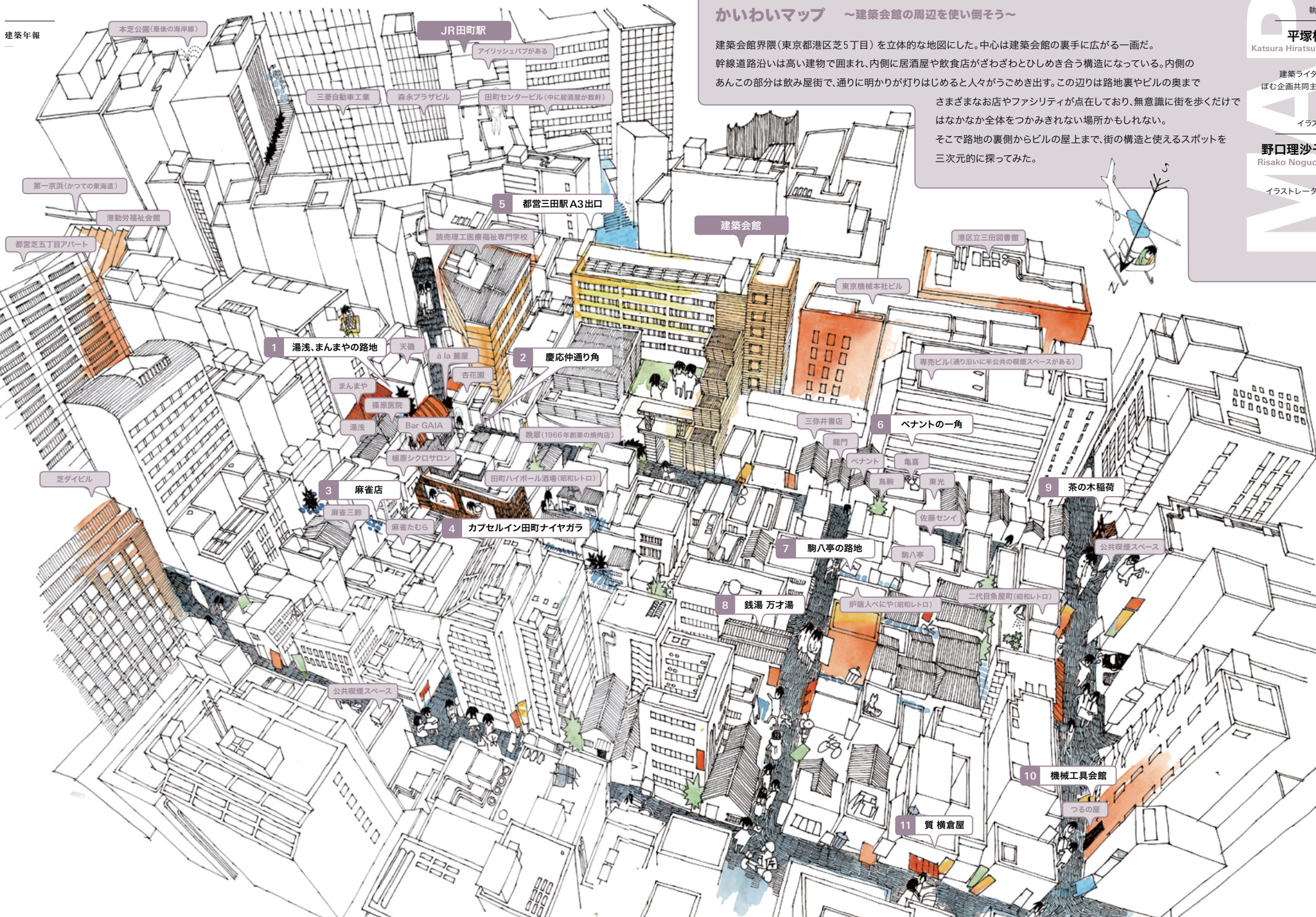
談話室

会館2F、事務室受付の奥へ進むと談話室がある。休憩、待ち合い、打合せ等のために会員が広く利用している。新聞、PC、プリンタがあり、壁には本会の歴代会長の写真がかかる。

広場

都市に開かれた広場は、周辺のビジネスマンにとっても貴重なオープンスペース。自動開閉式の幕屋根で覆われるとまた雰囲気が変わり、イベントスペースに早変わり。





かわいマップ ~建築会館の周辺を使い倒そう~

建築会館界隈(東京都港区芝5丁目)を立体的な地図にした。中心は建築会館の裏手に広がる一画だ。幹線道路沿いは高い建物で囲まれ、内側に居酒屋や飲食店がざわざわとひしめき合う構造になっている。内側のあんこの部分は飲み屋街で、通りに明かりが灯りはじめると人々がうごめき出す。この辺りは路地裏やビルの奥まで

さまざまなお店やファシリティが点在しており、無意識に街を歩くだけではなかなか全体をつかみきれない場所かもしれない。そこで路地の裏側からビルの屋上まで、街の構造と使えるスポットを三次元的に探ってみた。



昔はすぐそこまで海だった

日本初の鉄道は海の上を走っていた……と聞くと、驚く方も多いのではないだろうか。今の建築会館の目と鼻の先、田町駅を挟んだ現在のJRの線路上で起きていたことだ。

建築会館が現在地に移転したのは1980年代。すでに海は埋め立てられ、周辺に海の気配はほぼ感じられない状態だった。それ以前は、どんな状況だったのか。界隈の歴史を、まずは海の上の鉄道の話を起点に、簡単に振り返ってみたい。

1872(明治5)年に開通した鉄道、新橋～横浜間のうち、海上に築かれた堤防の上を通っていたのは田町～品川間の2.7kmだ。政府内での強い反対論や民間からの反発から用地取得がままならず、苦肉の策として生まれたものだった。アイデアを出したのは鉄道建設の推進者だった大隈重信。当時としてはただでさえ難しい線路を海の上につくってしまうとは、御一新の勢いというのは恐ろしい。

現在のJR田町駅がある部分は、明治の半ばまで海だった。海岸線は現在の鉄道の少し内陸側の、第一京浜と駅の間にあった。第一京浜がかつての東海道にあたり、周辺には武家屋敷が並んでいた。ちなみに今のJR田町駅と、森永プラザビル、三菱自動車工業本社ビルのある辺りは、鉄道敷設に反対の立場を取った薩摩藩の屋敷だった。



図1 | NECが入居する芝刈ビル近辺の路地

やがて海の埋め立てが進んでいき、1909(明治42)年に田町駅ができたころには、海の上を走る鉄道の姿はなくなった。かわりに現れたのは工場だ。大正時代の地図にはすでに、現在周辺に本社を構える森永製菓や日本電気の名があり、現在のようなオフィス街への変貌の予兆がうかがえる。

JRの線路沿いには今も、かつての海岸線の気配が感じられる場所がある。現在、本芝公園となっている一画だ。以前は雑魚場と呼ばれた魚の水揚げに使われる場所で、漁船の入る入江になっていたという。1968(昭和43)年まで海に通じていた、最後まで残った江戸時代の海岸線だ。

“界隈”の背景

JR田町駅周辺は、海上の鉄道敷設→埋め立てと、力技で構築された場所だった。一方で路地裏の風情が残る建築会館の周辺は、どのような歴史を持つのだろうか。

昔の地図を眺めてみると、建築会館の敷地は江戸時代まで、水野家の藩屋敷の一部だったことがわかる。近代に入ると会館のあるブロック一帯は、現在も建築会館の隣に本社を置く輪転機メーカー、東京機械製作所の工場と事務所になった。のちに東京機械製作所は敷地の一部を読売新聞社に譲渡した。さらに1972(昭和47)年ごろに今度は読売



図2 | 慶応仲通りから見た建築会館

新聞社から日本建築学会に対して銀座の旧建築会館土地建物の売却の申し入れがあり、その土地と交換する形で新しい建築会館の敷地として譲渡された。

建築会館の裏手に広がる商店街を、慶応仲通り商店街という。辺りは戦前から、田町駅から慶應義塾大学方面への通勤・通学路として使われてはいたが、そのころはお汁粉横丁、あるいは小便横丁などと呼ばれるさびれた通りだったようだ。1948(昭和23)年に地元の名士たちが商店会を設立し「慶応仲通り」という名前がつけられ、1953(昭和28)年から翌年にかけて道路が整備された。にぎわいと路地の情緒を併せ持つ学生街へと変化した背景には、民間中心、地元中心のまちづくりの取組みがあったようだ。とはいえ慶応仲通り商店会会長の湯浅孝雄氏によると「以前は喫茶店や麻雀店、洋服関係のお店が多くて、魚屋やカメラ屋なんかも並ぶような普通の商店街」。現在のような飲み屋街に発展したのはここ10年のことで、数十年以上続く老舗というのは、この界隈では意外に少ない。

ニッチの魅力めぐり

ここまでは引いた視点で、界隈の背景を探ってきた。次は寄りの視点で見ても、路地、居酒屋、カプセルホテルなど、都市的に興味深く、かつ使いのあるポイントを紹介する。

1 湯浅、まんまやの路地

慶応仲通り商店街を田町駅側から入り、右手にあらわれる路地。「水野監物邸跡」の灯籠と掲示がある。

湯浅

全面喫煙可の居酒屋。黄身が載った「つくね」が人気。平日はランチも。

まんまや

古民家を使った雰囲気ある居酒屋。土日にも営業。

篠原医院

長年この地で営まれる医院で、外科・胃腸科・内科・皮膚科を併設。急な体調不良に心強い味方。



図3 | 左手に「湯浅」、正面に「まんまや」がある路地。灯籠是水野監物邸ゆかり



図4 | わずか10席の蕎麦屋「à la 麓屋」。赤い看板が目印



図5 | 「駒八亭」に向かう路地。手前右は看板建築で、奥に進むほど住宅が増える

2 慶応仲通り角

老舗や個性的な店舗が並ぶ駅近エリア。
à la 麓屋
元フレンチのシェフが営む、座れる立ち食い蕎麦屋。食券制だが味は本格的。
天磯
昔ながらの天ぷら/小料理屋。
杏花園
3代続く中華。
Bar GAIA
小さな庭と祠が隣接する屋上バー。
植原シクロサロン
昭和44年開店のオーダーメイド自転車店。

3 麻雀店

かつては周辺に何十軒もあったという麻雀店。「たむら」「三鈴」など、今もところどころに残る。

4 カプセルイン田町ナイヤガラ

建築会館に最も近い宿泊施設は、いざというときに助かるカプセルホテル。男性専用。宿泊3,900円。

5 都営三田駅A3出口

建築会館に最も近い、都営地下鉄の出入



図6 | 屋根付き提灯、排気口などが複雑に並び壁

り口。地上出口付近2カ所にある200円の格安コインロッカーが便利。

6 ペナントの一角

数十年以上続く店舗が並ぶエリア。
ペナント
慶大生御用達の老舗喫茶店。
三弥井書店 …… 書店
龍門 …… 中国料理
のん子 …… スナック
鳥駒 …… 居酒屋
亀喜 …… 定食屋
東光 …… 韓国田舎家庭料理
佐藤センイ
大正時代創業の制服店。

7 駒八亭の路地

入口の右手に看板建築、左手に「ここで立ち小便をしない」の看板がある路地。縦横に抜け道があり、小さな店舗、やや高層のマンション、住宅が混在しているのも面白い。

駒八亭

路地のさらに奥に潜む居酒屋。田町で9店舗を展開する駒八グループ運営。

8 銭湯 万才湯

飲み屋街にひっそり佇むビル内銭湯。

9 茶の木稲荷

三田通りの一本内側にある、小さな稲荷神社。

10 機械工具会館

つるの屋
ビル地下の居酒屋。慶大生御用達。

11 質 横倉屋

昔からあり、重厚な店構え。

12 昭和レトロ調の居酒屋

近年、界隈に目立ちはじめた「昭和レトロ調」の店舗の居酒屋。
炉端人べにや
午前4時まで営業。「まんまや」の系列店。
田町ハイボール酒場
2010年10月開店。駒八グループ。
二代目魚屋町
“昭和”ではなく大正時代の民家を改修。
2009年1月開店。

13 路上喫煙スペース

街かどに、路上喫煙スペースがいくつかある。昼休みに特に、周辺に勤務する人々が寄り合う井戸端ふうの場所になる。

建築会館周辺の繁華街の特色は、路地の奥やビルの屋上、街かどのちょっとしたスペースなど「ニッチ」な部分に、いい店や使えるスポットが点在していることだ。飲食店のみならず銭湯や病院、カプセルホテルに質屋まである懐の深さも面白い。地図と併せて、界隈の使い出を感じてほしい。

参考文献

1. 「東京都港区近代沿革図集 芝・三田・芝浦」(東京都港区立三田図書館、1971)
2. 赤尾兼章「慶応仲通南振興会由來記」(慶応仲通南振興会、1968)
3. 中村建治「山手線誕生」(イカロス出版、2005)
4. 「日本建築学会120年略史」(日本建築学会、2007)
5. 慶応仲通り商店会 <http://www.keinaka.jp>